

日本語・日本文化研修留学生クラスにおける新たな試み —一橋大学及び地域を探索する—

A New Trial Class for MEXT Japanese Studies Students: Exploring Hitotsubashi University and Surrounding Areas

西谷 まり

要旨

本稿では、日本語・日本文化研修留学生を対象に行われた授業「Seminar for MEXT Japanese Studies Students A」において筆者が行った「大学と周辺地域を探索する」ことをテーマに掲げた授業について報告する。この授業ではまず、一橋大学キャンパスの中に点在している元学長らの銅像について調べた。次に立川市の現代アートの探検ツアーに参加して、興味をもった作品について発表を行った。そして、3つめに、インタビュー活動を実施した。インタビュー対象者は、地元の中堅企業の社長、同窓生の青年政治家、国際交流ボランティア組織を立ち上げて一橋大学の学生及び地域の外国人支援の活動を続けている女性の3名である。最後に一橋大学出身の有名人について調べて発表した。

キーワード：日本語日本文化研修留学生、インタビュー活動、大学、地域、体験

1. はじめに

本稿では、Seminar for MEXT Japanese Studies Students A において筆者が行った授業について報告する。対象学生は2018年9月から1年間、文部科学省の奨学金で留学している日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生と呼ぶ）である。日研究生は日本の大学において1年間、日本語能力及び日本事情、日本文化の理解の向上のための教育を受ける外国人留学生であり、応募資格は「日本語・日本文化に関する分野を主専攻として専攻している者」に限られている。

一橋大学では10年以上にわたって毎年約10名を定員として日研究生を受け入れており、2018年9月に来日した10名の国籍は韓国（5）、中国（1）、ミャンマー（1）、フィンランド（1）、ブラジル（1）、ドイツ（1）となっている。日研究生は一橋大学の日本語科目、学部教育科目¹、全学共通教育科目²を履修することができる。そのほかに Lecture for MEXT Japanese Studies Students I・II 及び Seminar for MEXT Japanese Studies Students A が日研究生用に特別に開講されている。Lecture for MEXT Japanese Studies Students I・II は留学の集大成として執筆する日研究生修了レポートの執筆を準備し完成するための日研究生全員が必ず履修しなければならない授業であり、Seminar for MEXT

¹ 商学部、経済学部、法学部、社会学部の4学部が提供する専門科目

² 英語や他の外国語、数学、情報、自然科学など学部の専門領域にとらわれない基礎力を身に着けるための科目

Japanese Studies Students A は担当教員が設定したテーマに興味をもつ日研究生が履修する選択授業である。

2. 他大学の日本語・日本文化研修留学生プログラム

荒井ほか (2017) は、京都という地の利を生かした授業の試みを紹介している。教室内で行う講義形式・演習形式の授業と、学外における見学や体験のための事前学習と実際の活動を行っている。学外の見学・体験の内容は能楽堂・祇園訪問、京都の企業見学、茶道、生け花などである。この授業を履修した日研究生からは「特別な体験ができてうれしかった」「自分の興味のあることをより深めるきっかけになった」などの感想が得られたということである。

また、パリハワダナ、森 (2012) は、文部科学省が毎年編集公開しているコースガイドの 2011 年度のものを対象に、課題研究の実態を分析した結果、課題研究の遂行がプログラムの修了要件の一部としている大学は 35 校に達していることを明らかにしている。さらに、課題のタイプについては、レポートまたは論文が最も多く、80%にのぼっている。

一橋大学の日研究生プログラムでも修了レポートを執筆し、内容を口頭発表することを修了要件の一つとしている。また、地域のボランティア組織の全面的協力を得た着物体験、大学同窓会の企画する鎌倉周遊と茶道体験を行っている。以前は、大学同窓会の紹介で企業や卒業生の経営する旅館でインターンシップを行っていた時期もあったが、インターン先の確保の難しさなどが理由で現在は中断している。

3. 授業の概要

本稿でとりあげる Seminar for MEXT Japanese Studies Students A は 2018 年度 9 月から 2019 年 1 月にかけて行われた日研究生のみが履修できる選択科目である。一橋大学について知ること、その周辺地域である国立市・立川市について知ることをテーマに、修了レポート執筆につなげることを授業の目的とした。受講学生はフィンランドの男子学生 T、ミャンマーの女子学生 N、韓国の男子学生 B の 3 名である。

1 コマ 105 分、全 14 回の授業の内容は 4 つの部分からなる。まず、一橋大学キャンパスの中に点在している元学長らの銅像の写真をとり、分担してその人物について発表した。次に立川市の現代アートの探検ツアーに参加して、興味をもった作品について発表を行った。そして、これが最も力を入れたものであるが、地元の中堅企業の社長、一橋大学の卒業生である立川市議会議員、国際交流ボランティア組織を立ち上げて一橋大学の学生及び地域の外国人支援の活動を続けている女性の 3 名を対象にインタビューを行った。最後に一橋大学出身の有名人について調べて発表した。

一橋大学のキャンパス内には上田貞次郎、磯野長蔵、福田徳三、佐野善作、村瀬春雄、矢野二郎、堀光亀、兼松房治郎、富田鉄之助、森有礼の銅像及びレリーフが点在している。

しかし、日本人学生はもとより、外国人留学生のなかにそれを知る者は非常に少ない。そこで、一橋大学を発展させてきた先輩がたの足跡をたどるために、すべての銅像及びレリーフの写真を撮影、その中からそれぞれの興味のある人物について発表するという活動を行った。

次に国立の隣街である立川市のファーレ立川の2時間のアートツアーに参加して撮影した写真をシェアするセッションを行った。ファーレ立川は米軍基地跡地の再開発によって1994年10月13日に誕生、アートが一体化した街づくりが計画され、街はイタリア語の「FARE（創る・創造する意）」に立川の「T」をつけ「FARET 立川」と名付けられた。設置された36カ国の92人が創作した109点のアートは20世紀末の現代世界を映し出していると言われている。

三つ目は最も力を入れたインタビュー活動である。銅像、アートについて調べることも一橋大学及び周辺地域を知るために意味のある活動であるが、実際に人と会って話をすることは留学の醍醐味であると考えた。日研究生は文部科学省の奨学金を得ているため、アルバイトをしている学生は少ない。そのため、教員以外の社会人と出会う場も限られている。一橋大学及び周辺地域で活発に活動をしている日本人と内容のある話をする機会として、インタビュー活動を実施することにした。

最後に一橋大学出身の有名人について調べて口頭発表を行った。学生Tは作家であり政治家でもある石原慎太郎、学生Nはいきものがかりのメンバーである歌手水野良樹、学生Bは政治家大平正芳について取り上げた。

4. インタビュー活動

インタビュー協力者は、国立・立川地域で経済的、政治的、社会的活動を行っている方々に筆者があらかじめ打診し、快諾いただいた方々3名である。日本語・日本文化研修留学生の立場、留学目的及び授業の内容とインタビューの目的などを共有するための事前打ち合わせを行っていた。

経済人から、外国人雇用を積極的に行っている立川市の企業経営者O社長、政治家から、一橋大学出身の20代若手Y立川市議会議員、社会活動家から、一橋大学の留学生および地域の外国人支援を行っているボランティア組織の代表A氏に依頼した。

インタビュー活動を行うにあたり、まず、質的調査法と量的調査、インタビュー手法について参考図書を輪読した。次に、協力者3名の概要について、ホームページ等を参考にして情報を共有した。それらの情報に基づいて、インタビューで聞きたいことを日研究生3人に宿題として考えさせ、インタビュー内容を確定させた。

インタビュー協力者それぞれに、日研究生1人ずつを主担当者に決め、インタビュー協力者にメールを送り、インタビュー日時と場所を交渉するという作業を行った。メールの文面については筆者がチェックしたうえで送信させた。インタビューは録音し、3人で分担

して書き起こしたものを持ち寄って授業中に1つにまとめ、筆者とともに、日本語の間違いを修正した。インタビュー報告としてまとめたワード文書をそれぞれの担当者からインタビュー協力者にお礼のメールとともに送信した。

以下にインタビュー内容と感想について詳述する。インタビュー内容の書き起こし及び日研生それぞれの感想から、本人たちの許可を得て抜粋する。下線を引いた部分は、授業中日研生が強調した部分及び興味深いと筆者が感じたものである。

4-1. 企業経営者O社長

インタビューは2018年10月26日に会社で行った。この会社は大手コンビニチェーンに麺や豆腐、サラダなどの弁当を納品している食品メーカーである。社員数は約700名で、外国人社員を200名以上雇用している。外国人社員は日本語学校の留学生が中心で、国籍はネパール・ベトナム・ミャンマーの順となっている。インタビュー内容は社長の役割、他社との違い、売れている商品、コンビニチェーンとの関係、外国人を雇用することの困難点についてなどである。

このインタビューの主担当者である学生Nの感想は以下の通りである。

「O社長とお話しすることで、会社の社長としての責任感や自分の人生についての目標を果たすのはいかにも大事だということが分かりました。重要な知識や経験を重ねてきたからこそ、O社長は今のように会社を作り上げられたと思います。会社を裕福にさせて、優秀な跡継ぎを育てているのはリーダーとしてとても立派だと感じました。会社に入出入りする時、靴を変えることや職場へ行く時、きちんと手洗いしているかどうかチェックしていると言われて、食品製造の会社である以上、「清浄度」をととても大事にしていると感じました。ただ物を作るのではなく、現在の社会の「安心安全」という思考を含めた製品を製造しています。そのような会社でミャンマー人の方々がお仕事を頑張っていると聞いて嬉しく思いました。」

学生Bは「すごく印象的だったことが、事業についての理念でした。自分だけでなく、会社のみみんなを背負っている分、企業を維持するのが一番大事なことではあるが、時代の流れを無視せず、いつも変わりつづけることが大事だとおっしゃったところがすごく印象に残りました。企業の社長から話を聴くなど、普段出来ない経験だったので、すごく意味深い時間でした。」と述べている。

学生Tは「会社の社長に会える機会がめったにありませんので、とても面白くて、印象的な経験になったに違いありません。特にO社長の仕事に対する熱心な心掛けや、社長としての責任や役割についての話は心に残っています。責任がどんなにあっても、大変だと思ったことがなくて、むしろ楽しいチャレンジとして思っているのは本当に素晴らしいと思います。インタビューのために工場に行けたのもとても面白くて、会社の現状を分かるのにも大事な要素になったと思います。」と述べた。

○ 社長から事業理念や社長の責任などについて話を聞くことによって得られたものは大きい。社長から話を聞く機会は、出身国でも稀であると日研生たちも述べている。また、食品メーカーであるため、出入りに際し手洗いを徹底するなど、細心の注意を払っていることを自分たちも身をもって体験したことも座学とは異なる学びになったことがうかがえる。

4-2. Y 立川市議会議員

Y 議員は一橋大学社会学部卒の 27 歳、2018 年夏に行われた市議会議員選挙に初当選した新人議員である。Y 議員の主要な政策の 1 つは「多様性に溢れる誰もが生きやすい立川を目指す」ことで、「今やどんな人でも多かれ少なかれ少なかれ生きづらさを抱えている時代です。特定の属性や性質によって不自由や差別的扱いで生きづらさを抱えることがあってはならないと考えています。互いが差異を尊重し合い、誰にとっても居場所がある生きやすい立川を目指します」というものである。同性パートナーシップの確立・ヘイトスピーチ禁止条例の制定・発達障害児に対する学習支援の拡充・障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例の積極活用に向けた取り組みと地域に一人暮らしの人や高齢者が集まれる居場所やコミュニティ形成の促進を提案している。

インタビューは 2018 年 11 月 5 日、一橋大学で行った。議員の仕事、27 歳の挑戦をキャッチフレーズにした理由、若い政治家のメリット・デメリット、進歩的なインスピレーションの源、立川市の魅力、差別の中でひどいと思うもの、憲法 9 条改正問題、学生に対する助言など多岐にわたる質問を学生たちが用意した。

Y 議員の担当であった学生 T の感想は以下の通りである。

「市議会議員のような偉い人なのに同じ 20 代で、フィンランドや他の西洋の国で話題になっている同性愛パートナーシップやヘイトスピーチ対策などのような進歩的な政策を貫いている人にインタビューできたのはとても面白くて光栄でした。日本にも緑の党が存在しているのをそもそも分からなかったの、日本の政治的状況を分かるのにもとても参考になりました。元一橋大学の学生ということもあって、一年間留学している私には、一橋大学がどのような可能性を学生に与えるのかを知るのもとても面白かったです。」

日本はまだかなり保守的なイメージがありますが若い政治家がそれを変えようとしていて、もっと平等な社会を作っているのは素晴らしいことだと思います。弱くて貧しいものの助けや味方になりたい願望も、やはり一般的にも望ましくて偉いこととして世界に認められているのに、実際にそれを大きく行動にする人はそれほどいないから、山本さんは本当に特別ですごい人だと思います。ある程度政治家として当然のことははずなのに、Y 議員のように、弱い人を助けることを自分の目的として宣言する政治家もあまりいないのではないかと思います。インタビューに応じてくれてまことにありがとうございます。フィンランドに帰った時も、とてもいいお土産話になるにちがいありません。」

学生 B は「実は個人的に政治家っていうのが特に心に響かないような感じで、どんな仕事をやっているかもわからないといった印象だったのですが、実際に Y 議員に会ってから、政治家というのは本当に世の中をもっといい方向に導くことが出来る素晴らしい職業なんだと感じるようになりました。Y 議員はすごくフレンドリーな人でした。もともと持っていた政治家の印象とはすごく違って、ちょっと驚きました。でも、自分の意見を出すところでははっきりと言うことから、やはり政治家さんだなという印象をもらいました。そしてインタビューの際、いろんなことを逆に質問してくださって、すごくいいインタビューになったと思います。」と述べた。

学生 N は「Y 議員は一人の若者政治家として、自分の役割を果たし、若者全体の政治に対して意識を高めようとしているのはこれからの世の中にはぜひ必要だと思います。立川に対して、それから日本に対して、自分の力でできることをできるだけ一生懸命にしているのを見て、応援したくなりました。自分の弱さも、強さもわきまえたうえで、行っている行動や目標は素晴らしいと思いました。政治家として人間関係の大切さを教えていただいて、私もこれから友達関係をもっと広げようと決めました。さすが一橋大学卒業生だと誇り高く感じました。日本は平和な国なので、特に心配することはないだろうと思っていましたが、Y 議員のお話を伺って、そうでもないことが分かりました。国民の平和な生活を保つため、もっと生きやすい場所に作るため、頑張っている人たちの話を聞きました。このような方々がいる日本はこれからもいい方向へ変われると信じています。」と述べている、

Y 議員が一橋大学の出身であることから、日研生たちは「さすが一橋大学卒業生だ」「一橋大学がどのような可能性を学生に与えるのかを知るのもとても面白かった」と、自分たちにひきつけて考えている。27 歳と日研生たちに近い年齢であるため「同じ 20 代で同性愛パートナーシップやヘイトスピーチ対策などのような進歩的な政策を貫いている人にインタビューできたのはとても面白くて光栄」「自分の力でできることをできるだけ一生懸命にしているのを見て、応援したくなりました」「Y 議員はすごくフレンドリーな人でした。もともと持っていた政治家の印象とはすごく違って、ちょっと驚きました」といった感想を述べている。「フィンランドに帰った時も、とてもいいお土産話になるにちがいありません。」という学生 T の言葉は実際に人と会って内容の深い話をする醍醐味をよく表現している。

4-3. ボランティア組織の代表 A 氏

A 氏は「まほうのランプ」という国際交流ボランティアグループの立ち上げから中心になって活動をしている女性である。インタビューは 2018 年 11 月 4 日に A 氏のお宅で行った。「まほうのランプ」は一橋大学の留学生とその家族の支援から始まったボランティア組織で、現在では地域の外国人にも支援の対象を広げている。自転車等のリサイクル、外国

人親子の交流の場、外国人が日本の小中学校で自分の国を紹介するイベントの仲介、国立市の小中学校に転入してきた外国人子女の通訳・日本語サポート等さまざまな活動を行っている。

残念ながら、主担当の学生 B はインタビュー当日、体調不良で参加できなかったため、学生 T と学生 N の 2 名でお宅を訪問し、インタビューを行った。インタビュー内容は、「まほうのランプ」の歴史、A 氏の役割、力を入れている活動、最も達成感を感じられる時、一番の思い出、リサイクルについて、借りたものが壊れたりなくなったときの対処方法、これからの活動の展望などである。

学生 N の感想は「日本で生活する外国人を支援するまほうのランプのようなボランティア組織があるのは一人の外国人、あるいは留学生としてとてもありがたいことです。着物を着るのを体験させることや日本語を教えることや留学生の生活支援などは日本での生活をもっと楽にさせていると思います。A 氏のお話を聞いて、魔法ランプのボランティア活動はこれからも続くことを確信した気がします。一つの問題は解決すると次から次へと出てくるから、それをできるだけ果たそうとしているのを見て、ボランティア活動をして、終わりがいいことが分かりました。ボランティア活動をしながら、人生に重要な人間関係を作り上げられるのも勉強になりました。自分が体験したことを面白く、教えていただいて、ありがとうございました。私ができることがあれば、ぜひやらせていただきたいと思います。」というものである。

学生 T は「まほうのランプはもう 20 年以上大切な社会への貢献をしていて、それについての話を聞いたのはとても面白くて、勉強になりました。国立の外国人の生活は昔に比べたらかなり便利になったとよく伝わってきました。特にまほうのランプが活動を始めたころは、外国人をかなりの圧倒的な不便から助けてくれたに違いありません。一番印象に残ったのは色々昔の外国人留学生に関する実話です。メリークリスマスと毎年電話してくるアフリカの人と東ドイツの留学生の狸の話などのような国際的な人間関係に基づいた経験を出来るのはやはりまほうのランプのような活動をするの大きいメリットです。その面でまほうのランプの外国人に対する手伝いだけでなく、現地人と外国人の交流の機会を作るのも素晴らしいことです。まほうのランプの今後の 20 年間の活動も応援しています。」と述べた。

まほうのランプは外国人を支援しているという性格上「一人の外国人、あるいは留学生としてとてもありがたいことです」「まほうのランプが活動を始めたころは、外国人をかなりの圧倒的な不便から助けてくれたに違いありません」といった共感的理解、「まほうのランプの今後の 20 年間の活動も応援しています」という心情の吐露につながったのであろう。

5. インタビューを通して得られたもの

このインタビュー活動で発表は、以下の作業を行った。

1. 事前の情報収集、2. メールでのアポイントメントを取る、3. 実際のインタビュー、4. インタビューを文字化してまとめる、5. お礼のメールとインタビュー報告の送信

2と5については主担当になった学生が行ったため1回ずつの経験であるが、その他の作業は3回ずつ経験した。事前の情報収集では読む日本語力、実際のインタビューでは聞く話す日本語力、文字化してまとめる作業では書く日本語力を磨くことを目標にした。これらは、修了レポートの執筆の際にも必要なスキルである。メールでアポイントメントをとる、お礼のメールと成果物の送付という作業は実生活においても大いに役に立つスキルだと考える。

しかし、何よりもの収穫は実際に中堅企業の社長、市議会で活動する政治家、国際交流ボランティアを立ち上げて活動を続けている現役の日本人に話を聞くという体験そのものであると筆者は考える。「企業の社長から話を聴くなど、普段出来ない経験」「フィンランドに帰った時も、とてもいいお土産話になるにちがいありません。」「もともと持っていた政治家の印象とはすごく違って」「進歩的な政策を貫いている人にインタビューできたのはとても面白くて光栄でした。」といった日研生の感想からも、実際にさまざまな活動をしている日本人と対面で内容の深い話をする経験が日研生に深い感銘を与えたことが見て取れる。

6. おわりに

本稿では、日本語・日本文化研修留学生を対象に行われた授業「Seminar for MEXT Japanese Studies Students A」において筆者が行った「大学と周辺地域を探索する」ことをテーマに掲げた授業について報告した。キャンパスの銅像や有名な卒業生について調べることを通して、一橋大学を作り上げてきた先人たちの業績を知ることは、これまで行ってこなかったが、留学生に一橋大学の歴史を知ってもらおう活動として今後も継続していきたい。留学生たちは立川駅周辺を買い物等で訪れることが多いが、ファーレ立川について知っている学生は少ない。ファーレ立川のアートツアーは学生たちにとって楽しい体験であり、「立川に行く楽しみが増えた」という感想も聞かれた。次回はもう一步踏み込んで、作品を作っている近隣のアトリエ探訪も組み入れていきたいと考えている。

一橋大学出身の有名人について調べて発表をする活動の中で、故大平首相が日研生 B の母国である韓国との関係に深く関わった人物であること、日研生 N のとりあげた「いきものがかり」の歌がミャンマーでも広く歌われていること、日研生 T の母国である遠いフィンランドで日本語を学ぶ学生が石原慎太郎の小説を読んでいることは、筆者にとっても新たな発見であった。

最も力を入れたインタビュー活動は、学生のみならずインタビュー協力者の留学生理解にもつながったことがうかがえた。O 社長からは「3人にお会いし、色々話させて頂きました。質問に対しての答えが、充分理解されたかは解りませんが、熱心に聞いてくださいました。3人とも素敵な学生さんたちでした。お役に立てたかどうかわかりませんが、こちらこそありがとうございました。」、Y 議員からは「先日は私も非常に興味深くインタビューを受けさせていただきました。インタビュアーの皆様ご出身各国、ミャンマー、韓国、フィンランド、いずれの政治状況も個人的に関心があったので、質問を受けるばかりでなく、私からも色々質問させていただき、本当に楽しかったです。」というコメントをいただいた。協力者 A 氏は国際交流ボランティアの代表であり、一橋大学の留学生との接点も多いが、「礼儀正しく前向きに話を聞いてくださいました。その後のフォローがないのが普通ですが、きちんと報告書も届き感心しました。こちらの反省として、事例を話すとそのインパクトが強過ぎて、伝えたい内容がぼけてしまう、大変勉強になりました」との感想をいただいた。留学生と地域の日本人、一橋大学の卒業生等とが内容のある話をする場を作るという意味でも今回のインタビュー活動は大いに意味があったと筆者は考えている。今後は、さらにインタビュー協力者の対象を広げていきたい。

参考文献

- 荒井美幸、木谷真紀子、高岸雅子 (2017) 『京都を生かした日本語・日本文化研修留学生に対する授業の試み』「同志社大学 日本語・日本文化研究」15号、pp.107-123
- パリハワダナ・ルチラ、森真理子 (2012) 「日研究生教育における課題研究の位置付けと役割：『2011年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生 日本語・日本文化研修留学生コースガイド』の分析を基に」『京都大学国際交流センター京都大学国際交流センター論』2号、pp. 91-112
- <http://www.tachikawa-chiikibunka.or.jp/faretart/about/> (2018年12月7日参照)
- <http://www.hit-u.ac.jp/guide/outline/map.html> (2018年12月7日参照)
- http://yamamoto-yosuke.com/?page_id=257 (2018年12月11日参照)
- <https://www4.hp-ez.com/hp/maho-lamp/page1> (2018年12月11日参照)

(にしたに まり 国際教育交流センター 教授)

